

インド文明における田園都市

(一) 文明論としての都市論

文明論が必然的に未来を抱えこんでいる事情は、齋藤博氏によって次のように定式化されている。

「あらゆる間は未来からの問いかけとして整理されることによって文明論的になるのである」。(1) 文明論としての都市論を考える場合、未来の都市をどうイメージするかによって、都市論そのものの性格に大きな違いが生じることになる。

現在の都市論の主流は、メガロポリスの解明に向かっていっているといえよう。二一世紀を展望しながら都市を論じる場合、大都市が主軸に据えられるべきことは、ある意味で当然である。しかし、小論では大都市の重要性を否定することなく、それとは違う角度から都市を考えてみたい。

八〇年代の日本社会の変化は思いのほか大きいものがあつたように思う。そのうちの一つは、地方都市の変貌である。それを充実化と見るか、平均化と見るかは論の分かれるところであろうが、地方都市が平均化に曝されながらも、各々の個性をもとと努力していることは認められる。

白田雅之

地方都市が個性を主張するとき、大都市の抱える病理に対する批判と、治癒への提言を含まないわけにはいかない。自然との交流のうちに成立する人間性の回復のテーマが、そこに奏でられてくる。地方小都市の「まちづくり」に実際参与しているプランナーたちが、多分にロマンティックなものに映る「人口三万から五万ぐらいの小都市」(2) 論に、主体的に取り組んでいるのが注目される。

一見ロマンティックに見えても、技術者の夢想には現実的な基礎がある。おそらく、現代は都市生活者の大群を形成する給与生活者が、オフィスからの解放を展望しうる時期にさしかかっている。パソコンの普及が、仕事を必ずしもオフィスで行なわなくてもよい条件をつくり出しつつあるように思われる。これは多くの場合、自室のパソコンの前にしがみつき、外部世界との接触を失った孤立的な人間像としてイメージされるようであるが、オフィスへの緊縛からの解放は、居住地選択の自由を人間に与える側面も見逃せない。同時に労働時間も短縮されていくから、人間は自分のためにより多くの自由を空間的にも時間的にも獲得することになる。そのとき、人間は密室に閉鎖されるよりは、自由な空

間と時間を利用して、より豊かな新しい相互関係を結ぼうと努めるのではないだろうか。地方の小田園都市が、こうしてオフィス労働から解放された人々の選択する居住地となる可能性は、決して非現実的なものではない。

経済活動や通信交通ネットワークの本質から考えても、大都市そのものが否定されることはないだろう。しかし、人間は人生のすべての時間を大都市に縛られなくても済むようになる。人生の諸段階の住み分け（インドではアーシユラマ¹住期といわれてきた）が、考えられるようになるかもしれない。大都市と地方の小田園都市の組み合わせと、その間を必要に応じて住み分けていく生き方のうちに、現代文明の未来を構想することは、あながち的外れとはいえないであろう。

この構想（夢想）は、文明論の難問^{アガダ}のひとつを解決する糸口にもなるかもしれない。文明論はあまりにも射程が大きすぎて、普通の能力しかもたない個人には、取りつきようのないものになっている。異常な能力をそなえた人間か、システムを操作しうる立場にある少数のエリートでなければ、文明的な考察は可能でもなく現実的でもないように思われている。しかし、人口三万から五万人の小田園都市が文明的な意義をもつなら、それについて考えることは私達にとっても十分可能であるし、主体的な運動者としてその形成や変貌の過程に参与していくこともできる。

文明論を壮大なシステム論として私達の視野の外に疎外するだけではなく、それをもう一度私達の手の届く範囲に取り戻す試み

も必要とされているように考える。地方の小田園都市論は、現代文明論を脱構築化するための手がかりを与えてくれる可能性がある。

そのためには、歴史的に存在してきた多様な文明のなかで、都市がどのように考えられてきたかを検討することが、迂遠なようでも、都市に関する私達の財産目録をつくり、さまざまなタイプの都市に人間が試みてきた実験の結果を知ることを通じて、私達の省察力に厚みをもたらしてくれるかもしれない。

以下において、インド文明の二つの都市論をスケッチして、問題提起を試みたい。

(一) 都市を理念的に必要なとしないインド文明

近代インドの産んだ大詩人タゴール (Rabindranath Tagore, 1861-1941) は、同時にすぐれた文明批評家であった。『生の実現』(一九一三年刊) は、タゴールの代表的な文明論である。その巻頭で、タゴールはヨーロッパ文明とインドの文明の本質的相違を、次のように論じている。

「古代ギリシャの文明は都市の城壁の内側で育てられた。事実、すべての近代文明は煉瓦とモルタルの中で生まれている。

これらの城壁は今なお人間の心の奥深くに跡を残し、われわれの物の考え方のうちに『分割して支配する』という原理を立てさせている。この原理がわれわれのすべての収獲物に防壁をめぐらし、物と物との間に仕切りを設けることによって、それを確保す

るといふ習慣をつけさせている。われわれは国と国とを、知識と知識とを、人間と自然とを分割して分けた。こうした習慣はわれわれが作り上げた防壁の向こう側にあるどんなものに対しても深い疑念を抱かせるので、それらが承認されるようになるまでには激しい抵抗と戦わねばならない。

……インドにおけるわれわれの文明は森林の中で生まれたので、その起源と環境という点ではっきりした特色をもつていた。この文明は自然の広大な生命に取り巻かれ、自然に養われ、自然から着るものを与えられ、さまざまに変化する自然の姿とひょろろに親密で誠実な交わりを続けてきた。……インドの心は自然の活気に満ちた成長と接触し続けていたので、みずから獲得したものを壁で囲んで境界線を引き、自分の領分を広げようという欲望などもたなかった。インドが目ざしたのは獲得することではなく、自覚することであった。真理はいっさいのものを包含していること、そしてこの世において完全に孤立しているものなどありえないことを悟った。真理に辿り着く唯一の道はわれわれ自身の存在と存在するすべてのものが相互に浸透し合うことによつてであると考へた。人間の心と世界の心とのこの深い調和を実現することこそ古代インドの森に住む賢者たちが目ざす目標であった⁽³⁾。

タゴールの文明論の視座を形成しているのは、人間が〈普遍的自然〉のなかに包摂されているという見解である。都市の壁はその内側にある人間を自然から人為的に分離する。その結果、自然は人間にとって異質で対立的な征服すべき対象となる。近代ヨーロッパ

文明の〈分割して支配する〉という原理の元型は、壁をめぐる都市のうちに見出される。それに対して、インドは開かれた森のなかで、豊かな自然と交流することを通じて、「人間を含めた世界を一つの大きな真理」と考へ、「個人と普遍的なものとの間に存在する調和」を強調した⁽⁴⁾。すなわち、近代ヨーロッパ文明とインド文明の相違は、前者が自然と人間の間を断絶的に把握するのに対して、後者が連続的に理解する点に求められる。その決定的な差異をもたらすものこそ、文明の基礎が壁をめぐる都市に置かれるか、それとも広大な自然のただ中に置かれるかという形態上の相違にほかならない。

都市文明との対比において、このように提示されたインドの森林文明が、どの程度歴史的な検証に耐えられるかは別問題である。タゴールの思想を支えているウパニシャッドの思想にしても、仏教やジャイナ教をはじめとするブラフマニズムの外部に展開した新興宗教と、「それぞれの思想の実現のためにはヴェーダの祭祀を捨て、家を捨て、禁欲的な生き方を取ることが不可避である⁽⁵⁾」と考へることで一致していた。こうした伝統的なブラフマニズムを否定する思想の登場は、紀元前六百年以降のガンジス河中流域における都市の出現と結びつけて理解されている⁽⁶⁾。これらの都市は堀をめぐるし塁壁を築いて要塞化していた⁽⁷⁾。都市の出現をもたらしたような急激な社会変化が、人里離れた森林や山頂へと苦行者を逐出したのである⁽⁸⁾。したがって、インドにおける精神形成の場としての森林は、都市形成と関連して選択されたといえよう。

マウリヤ朝の首都パータリプトラは、メガステネースの記録によれば、長辺九マイル、短辺一・五マイルの平行四辺形で、五九〇の塔と六四の門を有する柵で囲まれた大都市であった。マルクス・アウレリウス帝下のローマの約二倍の規模であった。マウリヤ朝以後グプタ朝まで繁栄する国際交易を背景として開花した古典インドの文化は、総じて都市文明の所産という性格が濃い。

タゴールもこうした歴史を無視していたわけではない。すでに引用した箇処につづいて、「その後、原始林は耕作地に屈服し、いたるところに繁華な都市が生まれた。強大な王国が建設され、世界のすべての大国と交わった」と述べている。しかし、インド文明の靈感の源泉は森の隠者の庵にあってと主張する。「物質的な繁栄が最盛期に達しても、インドの心は懸命な自己実現という古くからの理想や森の隠者の簡素な生活の尊さをいつでも敬慕の念をこめて追想した。そして隠者の庵の中に蓄積された英知から最も豊かな靈感を汲み取ったのである」。

タゴールには、インド史をバラモンに代表される自己保存の原理と、クシャトリアに代表される自己拡張の原理という、二つの対立する原理の対抗と補完作用によって把握する独特な歴史観がある⁽¹²⁾。都市に引きつけて紹介すれば、タゴールはバラモンを森林の住者、クシャトリアを都市の建設者として扱っている。バラモンは既成の社会組織の秩序と整合のリズムを求める保守主義者で静止の原理を体現し、一方クシャトリアは自己表現への自由と愛を求める生命的動的な統合原理、運動の原理を体現する。タゴール

ルは社会を自己保存というバラモンの原理と、自己拡張というクシャトリアの原理のダイナミックな調和のうちに考える。したがって、都市の建設やその結果としての都市文化は、けっしてタゴールのなかで否定されているわけではない。

にもかかわらず、タゴールの文明論のなかで、都市よりも森林が強調して語られるのは、植民地インドの住民として見据えた近代ヨーロッパ文明への批判がその根底にあるからである。タゴールは近代ヨーロッパ文明の破壊性・侵略性が、自然と断絶し征服の対象と見る自然観の延長にあると理解した。城壁で囲まれた都市における生活が、そうした自然観を形成したと見て、都市文明に批判的になったのである。タゴールにせよ、ガンディーにせよ、近代インドを代表する思想家が、都市よりは農村を重視する根底には、近代ヨーロッパ文明の侵略的本質への根本的否定があったといわなければならない。

しかし、タゴールは近代ヨーロッパ文明が「この現実の世の中において無限者を知」⁽¹³⁾ろうとする努力と、その成果である知的営為——科学・技術を評価した。これらの成果が、タバサヤー（敵身的、禁欲的な努力）というインドが育くんできた叡智において限定され方向を修正されるならば、平和と繁栄をもたらす基盤になると考えた。

以上、ごく簡単にスケッチしたように、タゴールの思想は、かたりの綾と鬚を帯びたものであって、都市ではなく森林に基盤をもつインド文明という理念型にしても、インド文明に現実存在

した都市を捨象して構想されたものではない。自然との交流のなかに、小都市をできるかぎり無理なく配置しようとする構想にあって何が問題となってくるかについて、タゴールの文明論は豊かなヒントを与えてくれるように思われる。

(三) 『チョンディ・モンゴル』に描かれた田園都市

本節では、『チョンディ女神靈驗記』という長編宗教詩に描かれた、田園都市グジュラトについて検討してみたい。

『チョンディ女神靈驗記』は、コビコンコンと称されたムクンドラム・チョクロボルティが、一五九八年に作ったチョンディ女神の威光を讃える有名な靈驗詩である。靈驗詩は一四世紀から一八世紀にかけて数多く作られた民俗神の威光を宣伝することを目的にした物語詩で、女性の行なった儀礼と深いかわりをもつと考えられる。(16) ベンガルの民俗文化を考えるうえで、極めて重要な文献である。

コビコンコンの作品は、二つの独立した物語からなるが、ここで取りあげるのはより古い第一の話である。主人公のカルケトゥは狩猟を業とする下位カーストの男である。結婚後、苦難に陥り、チョンディ女神を信仰するようになる。彼は女神のおかげで七千ワルビーの価値のあるルビーの指輪と七つの壺に入った財宝を得て、(17) 森を開墾し、グジュラトという小王国を建設する。

森の開墾と小王国の建設は、十六世紀にベンガルの南西部で現実が生じていた事象である。グジュラトはカリングガ(ベンガルに

隣接するオリッサの東北部)の領域内に位置していたとされる。

十六世紀にベンガルの南西部からオリッサに及ぶ森林地帯では、ムンダヤブミジュといった部族、あるいはゴープ、バクディ・マールといった下位カーストが小王国を建設していた。(18) それらの小王国の領域は、Singhham, Manham, Gopham のように、(19) いずれも、bhum で終わる名称がついている。作者のコビコンコンが庇護を受けたラジャ・ビルバンクラ・ラエとログナト・ラエの父子も、そうした土地の一つブランモンブムの領主であった。(20)

ブランモンブムのバラモン領主の場合例外としなければならぬが、これらの小王国の建設者の大部分は、部族民か下位カーストであり、(21) 彼らはヒンドゥー社会では当然のことながら周縁的な存在である。狩猟を業とするカルケトゥも彼らの一人にほかならない。したがって、カルケトゥが森を拓いてグジュラトを建設する叙述は、かなりの程度、現実の小王国建設の過程を反映していると見てよい。カルケトゥが財産を握るとすぐ、小狡い商人や書記の仕事をするカオストが螺集する。(22) つづいてカルケトゥが森の開墾にとりかかる段になると、「大いなる英雄が森を拓くと聞いて、日傭い労働者が、方々の国からやって来る」。彼らのなかには、ドフォルミヤに率いられた二千人のムスリムもいる。(23)

森が拓かれると、小王国の首府の建設が始まる。チョンディ女神は建設神ビシャイ(ヴィシユヴァカルマー)とハヌマーンを、都市建設の援助に派遣する。こうしてできあがった都市は、ラーマの首都アオーディヤヤーヤクリシュナの都ドゥヴァーリカーに匹

敵するものとなつた。⁽²⁵⁾都市名グジュラトは、プラティーハーラ朝が属したラージプートのグルジャラ族⁽²⁶⁾の連想を伴っているのかもしれない。こうした小王国の王家は、ラージプートを名のことによって、王としてヒンドゥー社会に君臨することを常套手段としていたからである。

グジュラトはまずなによりも、森から切り出された小王国の政治上の首都であった。まず都の四周を囲む壁が、要所には石を用いてタール椰子の高さに造られた。宮殿は中庭を囲む四つの建物からなり、床と柱などには石が用いられていた。後宮には池が掘られ、水辺に降りる四つの階段は石で畳まれていた。しかし、この小王国の王権は、チョンディ女神の賜物であった。⁽²⁷⁾そこで、宮殿の中核にはチョンディ女神寺院^{デヴァム}が建立された。

ベンガル南西部に簇生した小王権は、ヒンドゥー社会では周縁的であったから、その存在理由を宗教的な権威に求めざるをえなかった。カルケトウを支えたチョンディ女神は、もともと森の動物たちの女神であり、⁽²⁸⁾狩人たちに崇拜される土俗神であった。したがって女神自身がヒンドゥー⁽²⁹⁾パンテオンの周縁的な神格にすぎなかった。そこで小王権と女神信仰は協力してヒンドゥー社会における権威の確立を謀った。モンスル^{モンスル}カワガ^{カワガ}の靈験詩は土俗神がブラーナの宗教体系のなかに自らを定位する努力の結果であり、その作業を担ったのは、小王権の庇護を受けたバラモンにはかならなかった。

都市はできあがったが、住民集めは難行した。チョンディ女神は、カリンガの領民にグジュラトへ移るように夢告するが、それ

でも効果はない。⁽³⁰⁾女神は海の助けを借りてカリンガに洪水をおこす。⁽³¹⁾被害を受けた領民は、カリンガ王の援助が得られなかったため、グジュラトに移る。このくだりはボルン・モンドルという人物の移住と語られるが、⁽³²⁾モンドルは村長の称号だから、村民たちの移住を意味している。ここに見られるグジュラトとカリンガの緊張関係は、のちに両者の戦争となる。⁽³³⁾

グジュラトに集まったのは、二四ほどのムスリムのグループと六十ほどのヒンドゥーのカーストであった。⁽³⁴⁾彼らは宗教別に、またカースト別に居住地を与えられて住んだ。すなわち、グジュラトは住み分けの鮮明な都市であった。同時に、すでに森を拓く段階から多数のムスリムが、チョンディ女神の町グジュラトにかかわって住みつき、固有の宗教的営みを保証されているのは、注目しておいてよい点であらう。⁽³⁵⁾

ヒンドゥー、ムスリムの多種類の商人・職人集団からなるグジュラトは、賑かな常設市^{バザール}を備えていた。見落せないのは、グジュラトには政治・宗教センター^{センター}のほかに、交易センターとしての性格が色濃くあったことである。

しかし、小論でもっとも注目しなければならないのは、町を取り囲む城壁の存在にもかかわらず、グジュラトが周囲の田園とけっして非連続的には描かれていない点である。⁽³⁶⁾タール椰子やナツメ椰子^(ケジュール)が町を飾っていたし、ベール樹の森はシヴァ神^(シヨンコル)を祀るために残された。また、シヨステイ女神の神域にはベンガル菩提樹^(ポト)が残され、大木は住民に憩い

の蔭を与えるために切り倒されなかった。⁽³⁷⁾

住民から見ても、都市と田園との連続性は指摘できる。マリ＝カーストは花園をつくり、バルイ＝カーストは蔓草パーンを栽培するための竹づくりの小屋を建てた。ナツメ椰子の樹液を採取するシウリ＝カースト、舟頭のバトニ＝カースト、狩人のディボル＝カースト、漁師のコイボルト＝カースト、牛飼いのゴープ＝カーストなどが、各々の生業を営んでいた。⁽³⁸⁾商人や職人、あるいはバラモンと並べて農民のことが語られている。⁽³⁹⁾

『チョンディ女神靈験記』に描かれるグジュラトは、基本的にはベンガルの田舎町や大きな村の景色と重なることが多い。町のなかに田園が入りこみ、村が意外に都市的な性格をそなえている。

開拓地主家の形成する小王権という歴史的条件は失われているが、町と村が連続的に存在するベンガルの田園は、田園都市論の観点からもっと注目してよいのかもしれない。

注

- (1) 齋藤博「共存と status civitas——文明理論のための一試み」齋藤博(編)『文明理論への試み』東海大学出版会、一九七三年、一三六頁。
- (2) トオノロジ研究会(編)『まちづくりの神話』ぎょうせい、一九九〇年、一〇頁。
- (3) タゴール、美田稔(訳)『サーダナ——生の実現』、『タ

ゴール著作集』第八巻、第三文明社、一九八一年、九一一頁。

(4) 同前、一一頁。

(5) 渡瀬信之「古典期ヒンドゥー社会のアーシュラマとカースト」『文明』第三十六号、一九八二年、五頁。

(6) Herman Kulke & Dietmar Rothermund, *A History of India*, London & Sydney, 1986, pp. 52-54. ニラターバル、辛島昇、小西正捷、山崎元一(訳)『インド史・1』みすず書房、一九七〇年、五六頁。

(7) Kulke & Rothermund, op. cit., p. 53.

(8) ロミラニターバル、前掲書、三九頁。

(9) Kulke & Rothermund, op. cit., p. 61.

(10) タゴール、前掲書、一一頁。

(11) 同前。

(12) 「インド史のヴィジョン」(Bharatvarser Itihasdharā, 1912) に展開されている。『タゴール著作集』第八巻(既出)、一三五―一七一頁に、山崎元一氏の邦訳がある(英語からの重訳。ベンガル語原典とは多少相違があるが、英訳にしかない部分もある)。

(13) 都市の建設者としてのクシヤトリアについては、「王の生き方」の一項として『マヌ法典』(渡瀬信之訳、中公文庫、一九九一年、二〇九―二一〇頁)に論じられている。カウティリヤの『アルタラシヤーストラ』では、第二巻「長官の活動の第三章、第四章で、「城砦の建設」「都市の建設」に分けて、『マヌ法典』よりは詳しく論じている(上村勝彦(訳)『実利論』上、岩波文庫、一九八四年、九七―一〇四頁)。

- (14) 「インド史のチャート」一六九頁。
- (15) だが、「一四世紀のインド史」の作時を現存しない。
- (16) Sukumar Sen, *History of Bengali Literature*, Revised edn, New Delhi, 1971, p. 60.
- (17) Sukumār Sen(ed.), *Kabikāṅgaṅ Mūlunda-Bīracita Candimāṅgaḷ*, New Delhi, 1975, pp. 63-64.
- (18) Hitesranjan Sanyal, *A Study of a Few Mangalkavya Texts* (Occasional Paper No. 52) Centre for Studies in Social Sciences, Calcutta, 1982, p. 7.
- (19) 拙稿「インゲン・ヤハロ朝の交答」『東洋學報』四七—一一三頁。一九九〇年。一六三頁。
- (20) Sanyal. op. cit., p. 3.
- (21) Ibid., p. 7.
- (22) Sukumār Sen (ed.), op. cit., pp. 65-66.
- (23) Ibid., p. 67.
- (24) Ibid., p. 67.
- (25) Ibid., p. 71.
- (26) 山崎利男「インドにおける中世世界の成立」『中世史講座』第一卷「学生社」一九八二年。一九七頁。
- (27) Sukumār Sen (ed.), op. cit., p. 70.
- (28) Ibid., pp. 27, 31.
- (29) Ibid., p. 32.
- (30) Ibid., pp. 71-72.
- (31) Ibid., pp. 72-74.
- (32) Ibid., p. 75.
- (33) Ibid., pp. 86-93.
- (34) Edward C. Dimock, Jr. & Ronald B. Inden,
- “The City in Pre-British Bengal” in *The Sound of Silent Guns and Other Essays, Delhi*, 1989, p. 126.
- (35) Sukumār Sen (ed.), op. cit., p. 77.
- (36) Dimock & Inden, op. cit., p. 126.
- (37) Sukumār Sen (ed.), op. cit., p. 69.
- (38) Ibid., p. 80.
- (39) Ibid., p. 79. Dimock & Inden. op. cit., p. 126.